

読んでみたい この一冊

大阪産業経済リサーチセンター
主任研究員 天野敏昭



『フランス人は仕事に振り回されない :一流に学ぶ豊かな生き方のヒント』

●船越清佳 著 ヤマハミュージックメディア 1,300円+税

働き方改革関連法案が今国会で成立する見通しですが（執筆時）、同法案は、残業時間に上限を設ける規制強化の一方で、一部の専門職が、高度プロフェッショナル制度により労働時間の規制の対象外になる点で与野党間の激しい攻防がみられました。「働き方改革」という言葉が聞かれない日はないほど社会の関心は高いですが、十分に議論が尽くされたとはいえず、仕事と生活の連続性の観点も含め、議論を深める余地があると思われます。

また、最近の新聞各紙で、ビジネスの世界で西洋美術に対する関心が高まっているという記事を目にしました。働き方改革の一環で、AIやIoTによる効率化に注目が集まる一方、これらで補完することのできない人間の感性を鍛える取組みが企業で活発化しているという内容です。企業は、グローバル経済において、数字や論理だけでなく、経験、教養、美意識などに裏打ちされた深い思考力や直観力が、これからのビジネスにおいて重要になると認識しているようです。

前置きが長くなりましたが、本書は、在仏25年の日本人女性ピアニストが、フランスの各界で活躍する6人から、仕事、生活、文化芸術に対する実践や考え方をインタビューした内容に独自の考察を加えた仕事論で、働き方改革のあり方を考えるうえで、ユニークな示唆を与えてくれます。

本書に登場するのは、アンヌ・サンクレール（ジャーナリスト、『ハフィントンポスト』フランス版創設者）、カミーユ・グタール（「アニック・グタール」調香師）、ルイ・ミシェル・リジェ・ベレール伯爵（ワイン醸造家）、ニコラ・クロワゾー（「ラ・メゾン・デュ・ショコラ」シェフ・ショコラティエ）、ブノワ・クーレ（欧州中央銀行専務理事、経済学者）、ジェラルド・ベッケルマン（保険貯蓄会社AFER総裁、パリ国際アマチュアピアノコンクール創設者）という各界の傑出したリーダーですが、特異なケースというよりもむしろ、等身大の人間が、仕事と生活の連続性や感性を大切に人生を送り、そうした一個人の集積が、日々の生活を謳歌しつつも国際的に高い労働生産性（2016年は世界8位、日本21位）の実現に結びついていることに気付かされます。

著者は、芸術に向き合う音楽家の仕事の流儀の

視点も取り入れ、6人のインタビューの仕事や生活に関する哲学ともいえるキーワードを導き出しています。すなわち、①『共感』（自分の仕事の枠外の社会の動きに対しても意見を持ち、感受性をはたらかせて自分のできることを考える）、②『教養』（多様性を知り違いを受け入れる根源になる）、③『謙虚』（経験と実力を基盤にして、自分の掲げた目標の到達や理想に近づくために仕事をする）、④『選択』（変化を恐れて目をつぶって通り過ぎるのではなく勇気をもって挑戦する。そのためには、自分に正直であり自分で探して自分で選ぶ自発性と心を開いておくことが大切になる）、⑤『団結』（個を抑えて周囲と協調するのではなく、個が私欲にかられて行動するのではなく、個が自らの意志で心を寄せ合い、同じ目的に向かって行動するときだけに超人的な力が生まれる）、⑥『効率』（自分の能力に適していることを賢く見極めて職業とし、精神的なヴァカンス＝プライベートタイムの充実も図ることで、適度の客観性と精神のゆとりをもって働くことができる）です。

労働力不足下の働き方改革では、1人当りの付加価値の向上や効率的な働き方の追求が不可欠で、外国人を含む多様な人材の活躍に向けて成果主義的な人事・処遇制度への転換などが求められ、第4次産業革命の進展に伴って働き方そのものが大きく変わることが予想されます。目まぐるしい変化が予測される中で、仕事に振り回されない生活を考えるヒントになり得ると同時に、他国に学ぶことの意義に気付かせてくれる一冊です。

【著者略歴】

ピアニスト。京都市立堀川高校音楽科卒業後渡仏、リヨン国立高等音楽院を卒業。欧州や日本でのリサイタル、オーケストラとの共演、室内楽、器楽声楽伴奏、CD録音などのほか、『音楽の友』など主要音楽誌への定期的な寄稿、著名演奏家のインタビュー、パリの市立音楽院での後進の指導など幅広く活躍している。主著『ピアノ嫌いにさせないレッスン』（ヤマハミュージックメディア）では、仏日両国の長所を融合した指導法を紹介している。